

葉貫磨哉先生を偲んで

駒沢史学会会長

廣 瀬 良 弘

駒澤大学文学部歴史学科教授・文学博士葉貫磨哉先生（戒善磨哉高和尚）は平成十二年（二〇〇〇）十一月二日、午後四時二十五分、肺癌のために六十九歳で遷化されました。生前、駒澤大学とりわけ伝統ある歴史学科の基礎を築かれ、駒沢史学会の発展のために四十四年の永きに亘り、尽力されました。その功績を偲び、哀悼の意を表します。

先生は、昭和六年八月四日、福島県安達郡本宮町の古刹、曹洞禅宗の富春山石雲寺に生まれ、安達高校を経て、昭和二十六年、駒澤大学文学部・地理歴史学科に入学、卒業後、昭和三十一年九月に文学部助手として本学に奉職されました。昼間は助手の任を果たし、夜間は法政大学大学院日本史学専攻に通学、昭和四十年本学の講師に就任し、助教授・教授と昇格されました。この間、歴史学科主任、大学院日本史学専攻主任の要職を歴任され、大学の発展に貢献されました。

助手に着任された当時は、ほとんど、無給であったと、よく苦笑されておられました。戦後まもない頃の困難な時代から二十世紀の終わりまでの、まさしく激動の半世紀を本学の歴史とともに歩まれてこられました。

先生は日本禅宗史研究の第一人者として、夙に知られ、平成元年には、本学より文学部博士号を授与されました。平成五年五月、吉川弘文館から発行された著書『中世禅林成立史の研究』は学会で高く評価されているところです。中でも禅宗建築の代表として知られる円覚寺の舍利殿が戦国時代に実は大平尼寺から移築されたという学説が出され、一時は、かなり後世の建立

かと疑われましたが、先生は、大休正念「仏源録」の記載により、太平寺仏殿の成立が鎌倉時代であったことを論証されました。同仏殿はその後、改築されることなく移転されたか否かは疑点が残るにしても、ひとまず国宝としての舍利殿を「救った」ことは、有名なエピソードです。

なお、武蔵野の面影を今に残します野火止の平林寺の歴史編纂、鎌倉五山第一の建長寺史の編纂にも、その中心者としてかわられました。平林寺の石塔の調査の手伝いで、蚊に刺されながら、背を丸めて墓碑を筆写した思い出を持つかつての「学生」も少なくありません。また、『建長寺史』はその第一巻がようやく、発刊の運びとなる矢先でした。

秦野市史・板橋区史・新座市史や墨田区などの多くの自治体史編纂や文化財保護にも参画されました。先生のご専門を生かされたこのような活躍は、私たちにとりましても誇りとするところでした。

先生は誠に地道に禅僧の漢詩文を読解していくという、真の学者らしい学者でした。早朝には、梅干しに美味しいお茶を飲まれるのを楽しみとされ、五山文学の作品を読み解いた夕べには、美酒を愛でながら、くつろがれるのを無上の喜びとされておられました。

一方、先生は学生たちをつれて京・鎌倉の禅寺巡りを楽しまれ、お宿での会話もはずみ、杯を重ねるほどに陽気になられ、若い頃読経で鍛えた得意の喉も時折ご披露されました。

先生の研究・教育一筋のお姿は学生たちはもとより教職員にも深い感銘を与えておりました。

先生は本年度（平成十三年度）一年で奉職四十五年のご定年をお迎えの予定でした。いよいよ御健勝であられ、長寿を保ち、後進のためにご指導をお願いいたし、私共の心の支えとして見守って頂きたいと思っておりました。先生は細身ではありませんが、高校時代ラグビーでならした芯の強い体をお持ちであり、漢方薬にも深い造詣をお持ちでしたので、ご長命を確信しておりましたが、わずか三ヶ月余の入院生活で遷化されましたことは、誠に痛恨の極みです。

この度、駒沢史学会では、この『駒沢史学』五八号をもって葉貫磨哉先生への追悼号といたします。先生と親しく交誼を交

わした皆様や、薫陶を受けられた門下生の方々から研究成果や思い出をご寄稿いただきました。ここに献呈させて頂く次第であります。

先生が師匠でもある父上から頂戴した道号は「戒善」でしたが、ご自身は、上下を逆にして「善戒」と称しておられました。それは禅宗では諱（いみな）の下の文字と道号の上の文字とで熟語となるようにする安名の方法があります。それにより先生は「戒善」を「善戒」とされ、「善戒（道号）磨哉（諱）」と称しておられました。一字目と四字目で熟語となるようにされたのです。つまり、「善哉、善哉」「よきかな、よきかな」の「善哉」です。学問一筋の葉貫先生の生涯は、悲喜こもごもであったかと思いますが、最後に締めくくりますとおそらく「善哉、善哉」（ぜんざい、ぜんざい）であったのではないかと推察いたします。

先生の遺偈は二つありました。一つは、かなり前の交通事故に遭われた後に「事故何時有らやも知れん」と作成したものであり、今一つは平成十三年の正月か、お亡くなりになる直前のものと拝察します。

遺偈

有生有死

仏界一輪

六十九年

心骨清涼

山あり谷ありのご生涯を、誠に爽やかに表現されています。

先生のご遺徳・ご遺業を慕い、在りし日を偲び、ご冥福をお祈りいたします。また、私共後進は、それぞれの分野・世界で精進していくことをお誓いいたし、お別れを申し上げます。

（平成十四年〆二〇〇二〆十一月二日 因一周忌）